

# ゲーム

大村伸一

もう二週間、勝利はなかった。五十メートル先ではたまに短機関銃の射撃音がする。一日に数回。直ぐに音は止む。ここ二週間、大きな勝利はなかったが、たいした損害もない。戦略地図には敵司令部の推定位置が記されている。マークは情報大隊から伝えられた。まだ紫色で位置は確定していない。第三一戦術区域の指揮官である彼は、前線の真近に司令部を置いた。敵は攻撃の主軸を北に移動したのかも知れない。上級指揮官はそう考えているようだった。だがそれは陽動かもしれない。敵の部隊にはまだ決定的な動きがなかった。第三一戦術指揮官である彼は今日の夕方には敵の大規模な攻撃が、他でもないこの区画と隣接戦術区域の境界を狙って来る可能性もあると考えていた。

防御を固めるか、先手を取って攻勢に打って出るか。タイミングを掴まなくてはならないだろう。未明から降り始めた雨は、まだ音も無く森を濡らし、野営地を霧の中に隠している。だがこの雨は午後になれば豪雨になる。好機だ。戦術指揮官は地図の広げられた机を離れて、テントの入り口に立ち、動きのない前線の方に視線を送った。そのとき、伝令がテントの前に立った。よく顔を知っている青年兵だった。軍服も長靴も濡れた泥で汚れている。捕虜を連行してきたと告げた。偵察行動中に敵補給部隊を発見。強襲して捕えたのだという。捕虜の中で最も階級の高い指揮官だと自ら名乗りを上げた少尉が連れて来られた。

少尉の傷は捕虜になる前につけられたものではないようだった。何故そんなに抵抗したのだろうか。何かを隠すためか。他に十一名捕虜がいたが、全員の身元確認ができていた。少尉が身を挺して守らなくてはならない者などいない。それならば少尉の荷物を調べるしかないだろう。予想通り、少尉の少ない荷物には何に使うのか分からない物が隠されていた。小さめのテーブルクロスのような正方形に裁断された革と、立方体や円錐、三角柱など数十個の積み木のようなもの。革にははっきりとした線で曲線の模様が描かれていたが、その形には意味はなさそうだった。積み木といっても、高熱で半ば溶けてしまったのか、見ただけでは素材が何なのか分からない。しかし、少尉が何かを隠すとしたら、これしかないだろう。

「これは珍しいものだな」

指揮官がそう言うと、少尉は少し失望したように応えた。

「安物です」

「随分、使い込んでいるな」

「祖父から父が、父から私が受け継いだものです」

机の上に革を広げ、その上に積み木を適当に積み上げ、少尉を促した。少尉は少しためらってから、積み木を並べ始めた。決まりがあるらしく、機械のように素早い手つきで布の上に積み木を整列させると、少尉はため息をついた。少尉が何かを隠そうとしているのはやはり明らかだった。何も言わずにその先を促すと、少尉は急に早口になり、それがとても奥深いゲームなのだと説明を始めた。だがルールについては少しも触れようとせずいったいどのようなゲームなのか指揮官にはさっぱり分からなかった。

「君の国ではみんなこれを知っているのか」

そう尋ねると、少尉はそんなことはありえないと答えた。

「私の祖父が戦争で手柄をたてて、それで我が家に初級ルールが与えられました。それほどの名誉を得られる者は、百年に一人だと言われていますよ」

「完全なルールは王と少数の貴族だけのものなのだな」

調子を合わせてそう言うてはみたが、指揮官はそんな話を信じてはいない。それなのに少尉は王族に対する崇敬と、その高貴なゲームのことを話題にできる喜びに表情を輝かせた。考えてみれば分かることだが、そんな不完全なルールを教えられていったい誰と対戦するのだろうか。ゲームというのは名ばかりだ。それはゲームとはいえない。少尉の顔を無言で見つめていると、少尉の額に浮いた汗がはっきりと見えた。

「では、私と対戦してみないか」

指揮官がそう切り出すと、少尉は驚いて、ルールを知っているのかと聞いた。自分以外にこの敵国で、ゲームのルールを知っている者などいるはずがないと思っているのだ。

「なあに、君が私に教えてくれればいいではないか。そんなに興味深いゲームであれば、君も誰かと対戦したくてたまらないだろう」

そう言うのと少尉の手の指が細かく震えはじめ、急に無言になってしまった。

「どうしたのだ。さっそく始めようではないか」

そう言い、布を挟んで机の向かい側に椅子を置いて、その一つに座るように勧めたが、少尉は座ろうとしない。どうしたのかと尋ねるような視線を送ると、少尉はルールは教えられないと小さな声で言った。

「うん」

指揮官は楽しそうにそう言うと、続けた。

「そうだろうな。これはゲームじゃないんだろう。違うかね」

少尉は首を振り、そうではないと主張した。

「外国の知らない人間にルールを教えることなどできません。それは禁じられているのです」

少尉はまだこれをゲームだと言い張るつもりらしい。

「うん」

指揮官は嬉しくてたまらなさそうに言った。

「これが本当は何なのかを白状しないと、私もつらい命令を出さなくてはならなくなるんだよ」

少尉の馬鹿げた話に騙されるわけにはいかなかった。これは通信装置だ。少尉が後生大事に持ち歩く装置など他にないだろう。隙を見て少尉がこの司令部隊の場所を敵に連絡しようとしているのは分かっていた。こんな若造に出し抜かれはしない。だが、その若造がこの場をどう言い逃れようとするか、それには興味があった。追いつめて叩き潰す。戦闘とはそういうものだ。

少尉は、指揮官の言おうとしていることに気づくと、視線をあちこちに落ち着きなく彷徨わせ、逃げ道を探しているようだった。もしもこれがゲームだとしたら、自分の命を賭けてまでルールを秘密にしようなどとはしないだろう。そう考え、指揮官は少尉の目をただ見つめた。

「しかし。これはゲームなんです」

少尉はどうしてもこれがゲームだという嘘を貫くつमりのようだった。

指揮官は残念そうに眉を寄せて、興味などないというように布の上に並べられた積み木を一つ手に取り眺めた。それほど重さはない。滑らかな肌触りの表面は、溶けたというより丹念に磨かれたもののようだ。これをどう組み合わせれば、遠くに情報を送れるのだろうか。あるいは、この中の特定の二つを組み合わせると、通信可能になるのかもしれない。もしそうならその技術はすばらしい。

指揮官の手にしたものは、案外、重要な部品だったようだ。少尉は視線を足下に逸らし唇を噛んで、何かを言いそうになっている。沈黙を続けるだけで少尉は屈した。

「教えます」

それを聞いて笑みをこぼしそうになったが、指揮官はそれはこらえ、もう興味をなくしたようなふりをして、少尉の言葉を待った。

「ルールを教えます」

それは期待していた答えではなかったが、落胆を表情には出さなかった。

「ほほう。それは楽しみだ」

そう言うと、手にしていた部品を元の場所に返し、椅子に座って少尉が向かい側に腰掛けるのを待った。少尉はまだ迷っている様子だったが、とうとう覚悟を決めたのか勢いよく自分にあてがわれた椅子に座った。

ルールの説明は十分ほどで終わった。単純なルールだ。よくできたゲームというものはシンプルなものだといわれているが、このゲームはまさにそれだろう。

「面白い」

ルールを理解したことを示すため、そう言うと、指揮官は手のひらをこすりあわせ、第一手目を考え始めた。まだこれが無線装置だという疑いを捨てたわけではなかったが、ゲームで捕

虜に負けるわけにもいかない。そしてすぐにこのゲームが並外れた戦略を必要とするゲームだということに気づいた。ひとつの手を考えるために、無限ともいえるほど多様な要素を考慮しなくてはならない。その多様性は最初の一手から始まり、おそらく最後の一手まで、減少する可能性などなさそうだ。テントの屋根を打つ雨の音がすぐに小さくなり聞こえなくなった。

敵の総攻撃は夜半、豪雨の中で始まった。雨のあがった未明までに、部隊の半分以上を失い、軍の主力はこの地域から数十キロほど撤退するしかなかった。夜が明けるても司令部のテントはまだ残っていた。敵はそのテントを避けて先へと進んでいったようだった。テントの中では指揮官がゲームを続けていた。ゲームはまだ始まったばかりだった。自分の部隊を失った指揮官は、次の一手を考えることで頭がいっぱいになっていたが、心の片隅でぼんやりと、最初に少尉から聞いたルールには何か大切なものが欠けていたような気がしていた。

★

車椅子は軽く、見ていなければ誰も乗っていないと思うだろう。車椅子の老人は施設の記録ではもう百歳を超えている。しかし、その目にはまだ強い知性の光があり、その証拠にこうして毎日、一日中ゲームを続けている。ゲーム盤を置くテーブルはいつも決まっていて、ゲーム盤とその上に並べられた駒が片付けられた事はなかった。

老人は朝七時になるとこうして車椅子に乗ってテーブルにつき、夜七時になるまでそこで対戦を続ける。車椅子は自分では動かせず、すべて介護士あるいは彼の面倒を見ると決意した友人達の誰かが押してくれる。食事に対する興味はもうないらしく、放っておけば一日何も食わずに衰弱して死んでしまうのだろう。しかし、時間になると介護士あるいは彼の面倒を見ると決意した友人達の誰かが、彼の横のテーブルに置かれた食事から、一口ずつスプーンやフォークで彼の口に運び、彼はそれを長年の条件反射だというような口の動きで咀嚼し飲み込む。

ゲームと言ったがそれがどんなゲームなのか、施設の誰も知らなかった。その様子を見ていて、それがゲームなのだと思っただけだ。テーブルに置かれたゲーム盤は何かの革でできおり、一辺がテーブルの手前から向かい側の端までぴったりの長さの正方形。ただ、その表面にはぐねぐねと曲線が描かれ、曲線で囲まれた領域には抽象的な模様が描かれ、領域ごとに異なる色づけがなされている。物好きな女が施設の図書室にある大百科事典を隅から隅まで調べたがそんなゲーム盤を使うゲームなどなかった。

それがゲームだと確信できるのは、そのゲーム盤の上に配置された駒があるからだ。駒の形はとりどりで、同じ形のものは二つとない。だから、それがゲームの駒だという先入観がなけ

れば、ただの小さな模型が並べられているだけだと思っただろう。今「模型」と書いたけれど模型というものに何か模す対象がなくてはならないのなら、それは模型ではないだろう。どこかの焼け跡から拾って来た子供のおもちゃのように、半ば溶け表面が斑になったそれには、何かに似せて作られたという印象はなかった。「鳥のようなもの」「工場のようなもの」「船のようなもの」「象のようなもの」と言えなくもないものが、ゲーム盤の上に配置されている。毎日少しずつ彼によって動かされるその駒は、全体として特別な陣形も認められず、ぼんやりと見ていれば昨日も今日も何も変わっていないと思うだろう。

第一、駒は色分けもされていなければ、その形に特定の向きがありその向きを揃えて置かれているわけでもないのです、どれが味方でどれが敵なのかも分からない。駒に敵も味方もないのだとすれば、それは果たしてゲームなのだろうか。そこまで考えが及んだとき、彼はまた一つ駒を移動する。

しかしこのゲームに対戦相手は存在していて、毎朝十時になるとその日の「手」が届けられる。宛先と「手」だけが書かれた無地のカードに貼られたありふれた切手にはかすれた消印が押されている。対戦者同士にしか分からない記号で示された「手」を読み、彼は盤上の駒を動かす。そして、それによって微妙に変化した盤面の戦況を分析し、自分の次の手を決めるとその妥当性を何度も検討した後で、夜の七時丁度に彼は自分の「手」を指す。

彼は自分の手を郵便で送っていないのに、翌日の朝十時になると対戦相手からの「手」が彼の元に届く。それが毎日繰り返される。

施設の職員の間では、彼の対戦はもう七十年以上続いているのだと言われていた。彼が施設にやって来たのは、記録によれば最後の戦争の直後だから、その時からすでに対戦が続いているのであればそうなのかもしれない。その長い間途絶える事のなかったハガキがついに来なかった日、彼は落胆することなくいつもと同じように一日を戦況の分析に費やし、夜の七時になると自分の手を指してその日を終えていた。交互に自分の手を指す、そんなゲームではなかったのだろうかと彼のまわりの者達は不審に思ったが、ルールを知らないのでは彼が間違えていると指摘するわけにもいかなかった。

通信のない日が二週間続いた後、彼宛に届いたのはハガキではなく包みだった。包みを開ける力もない彼に変わって介護士の一人が箱に掛けられた紐を解くと、中から現れたのはゲーム盤に並べられている駒と同じような作りの品だった。きっと、それも駒なのだろう。彼は興味深そうにそれを自分の手に受け取ると、じっとみつめ、手の中で転がして様々な角度から駒の細部までを確かめ続けていた。その日は、夜七時になっても自分の手を指すことなく、届いた駒を手のひらに握りしめたまま車椅子を押されて彼は自室に戻った。

翌朝、彼は自分のベッドで死んでいた。昨日届いた駒はどこにもなかった。怪しんだ職員が口をこじ開けてみたが、駒が喉に詰まっているということもなかった。

彼の棺には、ゲーム盤や駒と一緒に、誰かが写した最後の日のゲームの盤面の写真が納められた。たぶんそんな写真などなくても、いくらでも続きはできただろうと葬儀に参加した者達は話した。